

西アジア考古学における発掘報告書出版の重要性

長谷川 修一

Significance of Publishing Excavation Reports in West Asian Archaeology

Shuichi HASEGAWA

発掘報告書が考古学者にとって重要であることは言うまでもない。それは自分が発掘した遺跡以外の遺跡やそこから出土した遺物の情報を知る主要な媒体である。逆に、どんなに大規模な発掘をして貴重な遺構や遺物が豊富に見つかったとしても、それが出版されないのであれば発掘をした人間のみがアクセスできる知識に終わり、それらの人々がやがて死ねば、その知識は永遠に失われてしまう。これでは人類の過去の研究になんら貢献することができず、発掘に注ぎこまれた時間や労働力、そして莫大な資金はすべて無に等しいと言っても過言ではないだろう。このことから、発掘報告書を出版することはあらゆる遺跡を発掘する報告者が決して逃げることのできない責務であると言えよう。

しかし現実を見てみると、この責務が十分に果たされているとは必ずしも言い難く、考古学者にはさぞ耳の痛いテーマでもあるだろう。こうした状態を打開するためには、まず現状の把握から始めねばならない。1996年の『エレッツ・イスラエル』という出版物の第25巻では、この問題に二人の研究者が取り組んでいる。一人はイスラエル人考古学者Z・ヘルツォグ (Herzog) で、「考古学的発掘の出版」という論稿を書き、もう一人はキプロス考古学の大御所V・カラゲオルギス (Karageorghis) で「出版するか消え去るか…」という表題の刺激的な論稿を書いている。ここでは最初に、ヘルツォグの論稿から、イスラエルの発掘における報告書の出版状況のデータを、次にヘルツォグとカラゲオルギスそれぞれが論じる問題の所在と彼らが提案する解決方法を紹介する。最後に、日本の発掘調査隊が抱える発掘報告書出版に関する固有の問題について管見を述べたい。

イスラエルにおける発掘報告書についてのデータ

ヘルツォグは、「新・聖地の考古学的発掘事典 (The New Encyclopaedia of the Archaeological Excavations in the Holy Land, Jerusalem, 1992)」に掲載された、銅石器時代から鉄器時代の遺跡の発掘情報に基づき、発掘遺跡数、発掘シーズン数と報告書の刊行数に関するデータを集計した。発掘調査は期間も調査団の体制もそれぞれ異なること

から、こうした集計には様々な問題がつきまとう。例えば、異なる調査団による同一遺跡の発掘調査の報告書をどのようにカウントするか、大規模な発掘と試掘程度の小規模な発掘とをどのように区別するかといった問題である。ヘルツォグはこうした集計方法が必ずしも正確とは言い難いことを断りつつ、大きな傾向を掴む上では有効としてデータを紹介している。

ヘルツォグは6つの表を作成し、データを紹介した。これらの表は、発掘が行われた時代によって、1) 第一次世界大戦まで、2) 1920-1930年代、3) 1940-1950年代、4) 1960年代、5) 1970年代、6) 1980年代の6つの時代に分かれている。それぞれの表には、a) 発掘された遺跡ごとに何年から何年まで発掘されたか、b) 何シーズン発掘があったか、c) 報告書が刊行されたのは何年から何年までか、d) 報告書の第一巻が刊行されるまでに経過した時間、e) 報告書の出版完了まで何年かかったかという項目が設けられている。

以下、それぞれの表に表れた傾向をまとめる。19世紀から第一次世界大戦までの、「発掘の曙」の時代、発掘報告書は概して滞りなく刊行されている。当時の調査団は通常、一人の考古学者に一人の建築家といった少人数の体制であったが、調査自体は百人を超える労働者を雇用して行っていたことを考え合わせると、彼らが報告書作成にも真摯に取り組んだことが想像できる、とヘルツォグは述べている。しかしこれらの報告書は今日の水準から見ても満足できる情報を提供しているわけではない。この時代、33シーズンの発掘調査に対し、24の報告がなされている(73%)¹⁾。

次の1921～39年では、発掘遺跡数と発掘期間が増加する。平均すると発掘終了から報告書出版まで、10年から20年の歳月が必要とされている。この時代になると質の高い報告書が刊行されるようになる。こうした良質の報告書を刊行した調査団の責任者は、すべての時間とエネルギーをその作業に投入し、報告書の刊行が終了するまで、新しい遺跡の発掘に従事しなかった点をヘルツォグは強調している。107シーズンの発掘に対し88の報告がなされている(82%)。発掘報告書刊行の割合がピークを迎えた

時代であった。

次の時代は第二次世界大戦後である。この時期、報告書刊行に危機的兆候が見出される。発掘された遺跡に対し、今日に至るまで報告書が一冊も刊行されていない遺跡が10ある。すべての報告書の刊行が終了しているのは5遺跡のみであり、113の発掘シーズンに対し、24の報告がなされている(21%)。

1960年代になると発掘報告書刊行の割合が最悪の状態を示す。28遺跡のうち、11の遺跡の報告書はまったく刊行されておらず、198シーズンの発掘に対し、76シーズンはまったく報告されていない。1960年代後半ではこの傾向が一層深刻化する。唯一のよい点は、発掘が進行している間に報告書が刊行され始めた遺跡が出てきたことである。

1970年代、発掘遺跡の総数は増え、全部で44の遺跡が発掘された。これらの遺跡の大部分は発掘を完了しているものの、そのうちの33の遺跡では報告書がまったく刊行されていない。この点では60年代よりもさらに状況が悪化しているが、同時に幾つかの小さい遺跡では、3～4シーズンにわたった発掘の報告書が、調査終了後10年を経ずして刊行されている。他方、発掘調査が10～15シーズンに及んだ、より大きな遺跡では、報告書が一冊も刊行されていない。

1980年代に発掘の始まった22遺跡のうち、9遺跡は依然として(1996年当時)発掘が継続されているが、幾つかの遺跡ではすでに報告書が刊行され始めている。

この短い観察からわかるのは、イスラエルの遺跡の数百年シーズンに及ぶ発掘は報告書が刊行されていない、ということである。146の発掘調査、877シーズンのうち、報告書が刊行されたのは40遺跡、つまり27%に過ぎない。ヘルツォグは、これでは発掘が終了していても、それについて情報をまったく得ることのできない遺跡が多すぎる、と述べている。

考古学はその研究対象自体を発掘しながら破壊していく。こうした学問の性格上、報告書未刊行という状態は他の学問分野におけるよりも考古学において一層深刻な問題であることをヘルツォグは指摘する。発掘作業とは実験室における実験と異なり、再現性に乏しいからである。このことから、報告書刊行の重要性と、刊行されていない場合にもたらされる害は明らかであろう。以下、ヘルツォグはこのような状態を招いた要因として、以下の外的・内的要因を列挙する。

外的要因の一つ目としてヘルツォグは、発掘方法と記録方法の改善を挙げている。現代の発掘では、発掘区について最大限の情報を収集するため、記録作業(実測、写真撮影、測量等)にも細心の注意が払われる。調査団は技術分

野を担当するスタッフとの連携に、発掘期間中もそれ以後も多大な努力を払う²⁾。こうした異なる分野から成るスタッフは、時として様々な国の成員で構成されることから、全体の作業は複雑になり、また長期の期間が必要とされるのである。幾つかの発掘プロジェクトに関わっている機関では、他のプロジェクトの実測・撮影などの作業が終わるのを順番待ちしなければならない。

ヘルツォグが挙げる二番目の外的要因は発掘目的の多様化である。考古学において、関心分野が多様化・専門化した結果、発掘調査団の中に、植物学者や動物考古学者、地質学者など、多彩な研究分野のメンバーを含むことになった。そのため、調査資金をこれらの研究者にも割り振る必要が生じ、調査全体の費用をこれまで以上に増やさねばならない。それぞれの分野における研究のペースの違いや優先順位の差異は、報告書執筆作業を複雑化し負担を増大させ、結果として刊行を遅らせる原因となっている。

第三の外的要因としてヘルツォグが挙げているのは、機関からの圧力である。イスラエルの調査団には、多くの場合考古学専攻の学生が参加するが、彼らの支払う授業料が発掘調査の主要な資金、つまり財政的基盤となっている。学生の発掘参加を発掘調査の前提とする機関にとって、発掘は毎年継続的になければならないものなのである。これは、報告書刊行に向けた作業を必要とする人々にとっては圧力となっている。

次にヘルツォグは以下の内的要因を挙げている。一つ目は「発見」という行為に関係している。今まで知られていなかったものが地中から見つかる、という体験は考古学特有のものである。次のシーズンこそ「世紀の発見」ができるかもしれないという秘められた希望が、報告書刊行の努力を脇に追いやって、もっと発掘を続けようという動機になっている、とヘルツォグは分析する。

二つ目の内的要因は完全な報告書刊行の負担の重さである³⁾。部分的な報告書や概報などを刊行する利点は、選択した情報のみ出版できることにある。その名の通り、完全な報告書とは発掘調査で得た、遺跡に関するあらゆる情報の報告である。そこには時として(報告者にとって)それほど興味深くない部分も含めねばならないし、保存状態が悪く解決の難しい層位を含む時代についても報告せねばならない。こうした理由から、完全な報告書を後回しにしてまず部分的な報告をする傾向が見られる、といのがヘルツォグの指摘するところである。

ヘルツォグが挙げる三つめの内的要因は、継続中の発掘をいち早く報告してしまうことへの躊躇である。10年、20年と多くのシーズンを重ねた発掘では、以前一度到達した結論が、別の地区の発掘によって変わってくる可能性がある。こうした状況は、発掘が遺跡全面に及ばない場合

には不可避である。結論を書き変えるような面倒を避けた
いのために、現時点での結論を報告してしまうのをためら
う傾向が見られる。

最後にヘルツォグは完全な報告書刊行の必要性と報告書
未刊行の害について強い口調で述べる。報告書が刊行され
ないことにより、他の研究者はすでに発掘されている遺構・
遺物の情報にアクセスできない。同時にこれは学問の発展
を阻害し、考古学者としての職業倫理を脅かす重大な障害
である。完全な報告書ではなく、遺構や遺物を部分的に予
備報告として、あるいは一般向けの刊行物として出版する
ことは、他の研究者に手早くそれを紹介することができる
という利点もあるが、完全な報告書の出版を避けることは、
考古学という学問の基礎を破壊するものである、とヘル
ツォグは糾弾する。なぜなら、手の内を他の研究者にすべ
て見せずに、物事を議論するやり方は科学的ではないから
である。ヘルツォグは「報告書の未刊行という現象が、学
問的に見て、考古学を欠陥のある学問にしている」と嘆
いている。

ヘルツォグによれば、報告書刊行の遅滞は、考古学にお
ける理論的枠組の変化にも関連している。1960年代初頭
以降、考古学では学問的革命が始まり、遺物とその意味、
年代、型式学、といったものから、これらのものの分析を
通じた過去の人々の社会組織の復元に関心対象が移って
いった。「社会考古学」という呼び名で呼ばれるこの新た
なアプローチでは、遺物は研究対象そのものから手段へと
変わっていった。これに呼応し、発掘調査も過去の社会の
様子を知るための情報収集の手段にすぎなくなったので
ある。アメリカとヨーロッパで始まったこの考古学革命は、
それに対応した方法を模索し、対象とする時代の社会経済
構造の分析に必要なデータの体系的な収集方法が考案され
た。こうした動きの中で、動物骨・植物遺存体の分析、地
質学的研究などが導入されたのである。これらの分野の分
析結果を総合することにより、過去の社会像をより正確に
復元することができるようになった。

しかし、イスラエルでは考古学は別の道筋を辿って発展
していったことをヘルツォグは指摘する。「聖書考古学」
に支配されてきたイスラエルでは、考古学革命の到来が遅
れ、遺構・遺物の年代や型式に関心が集中し、出土したも
のと歴史史料との関連性を模索することが長い間一番の関
心事であり続けた。その後、社会考古学の新たな研究方法
がイスラエル考古学にも浸透し、大部分の研究者がこれを
採用するようになって、「学際的アプローチ」が発展して
いった。しかし、これは方法を採用したというに過ぎず、
考古学者はニュー・アーケオロジーの理論を完全に咀嚼し
たわけではなかった、とヘルツォグは批判する。こうした
新たな研究対象が、考古学においてどれだけ重要なのかを

理解せず、自分自身なぜ必要なかわからない研究対象の
巨大な山に埋もれている考古学者も少なくない、と言うの
である。たとえ動物骨などの資料が専門家に渡される場合
でも、分析結果が、報告書中に「付録」として出版される
に留まり、その結果が過去の社会の復元に生かされていな
い。

こうして要因を分析した後、ヘルツォグはこのような危
機から抜け出す道について説く。考古学者は、考古学とい
う学問に起きている理論的枠組の変化にまずは気づくこと
が大切で、それによって初めて新しい研究方法に自分自身
を適応させることができる。社会考古学的アプローチを採
用するという事は、遺跡の存在条件と変化する周囲の環
境に住民がどのように適応したかについて最大限の情報を
収集することを意味する。「社会考古学的問題意識を持つ
研究には、異なる研究分野を総合する真摯な努力が必要と
される」、とヘルツォグは言う。

その後ヘルツォグは、問題解決のための実際的な提案を
する。彼によれば、「投資の優先順位を変える」ことが必
要である。研究資金の支出においてこれまで一番大きな割
合を占めていた部分は発掘作業そのものであり、ごくわず
かな資金が資料整理・分析、そして出版に回されていたに
すぎない。出版のペースを改善するには、資金と人材を投
資する優先順位にも革命的な考え方が必要で、出土遺物の
分析を含めた層位学的分析に大きな資金・人材を投入すべ
きであり、とりわけ、考古学的文脈の明らかな大量の動物
骨、気象学・岩石学・放射化分析・炭素同位体による年代
測定、化学分析など、実験室で行う分析にかかる膨大な費
用も考え併せるべきである、とヘルツォグは説く。

こうした総合的アプローチが真価を発揮するのは研究目
的がよく練られている時である。そのためには、発掘報告
書の内容は最初から決められていなければならない。ヘル
ツォグは、「報告書の刊行とは、発掘企画の初日に始まる」
と述べている。

発掘報告書が何を含むべきかについて、ヘルツォグは以
下のように述べる。報告書刊行の負荷を軽減する方法の一
つは、重要だと考えられる部分に関する情報だけを選択し
て出版することであるが、この方法は断じて取ってはなら
ない。発掘された遺跡は発掘の作業によって破壊される。
ヘルツォグは「遺跡に残るすべてのものは結局、掘り返し
た跡と発掘報告書のみ」と語る。一定の時間が経つと古い
ものとみなされてしまう他の学問分野の出版物とは対照的
に、発掘報告書は出土遺物・遺構研究の唯一の資料として
永久に残る。それゆえ、報告書では対象物のあらゆる情報
を最大限正確に詳細に書くことが求められる。「現在は取
るに足らないと思われる情報が、将来には重要性を帯
びてくるかもしれない」可能性をヘルツォグは指摘し、次

のように述べている。「20世紀初頭に発掘されたエリコ、シケム、メギドの層位に関する情報がすでに失われてしまっているのを見る時、我々はみな痛みを感じる。我々は未来の考古学者が私たちの報告書を読んで同様の感情を抱くことがないよう、あらゆる努力を惜しむべきではない」。

発掘報告書だけでなく発掘方法についてもヘルツォグは意見を述べる。遺跡は発掘によって破壊されるのであるから、我々は現在また未来の同僚に最大限の仕方での発掘のプロセスを復元できるような方法を取る責務を負っている、と彼は言うのである。こうする時初めて、科学の基礎目標の一つである「実験の復元性」を現実的なものにすることができ、我々の結論の信頼性を再検討することが可能な状態を提供できる、とヘルツォグは主張する。

ヘルツォグは報告書刊行という困難な作業に取り組む考古学者に次の点を強調して鼓舞する。それは、「完全な報告書」とは「最終報告書」を意味していない、ということである。「むしろ他の研究者たちもそれを使い、その遺跡の持つ謎の解明に参加することができるための道具」である、と述べ、「完全な報告書とは道の始まりであり、終わりではない」とヘルツォグは締めくくる。

この論稿が出版された1996年から10年余り経過した2006年に、筆者が関係するテル・レヘシュ発掘調査の発掘許可を申請したが、申請過程で以下のことが明らかになった。まず、現在のイスラエルの法律では、発掘許可を受ける際に、発掘にかかわる全予算のうち発掘作業、資料分析、遺跡保存、出版のそれぞれにいくら予定しているかを具体的に記さねばならず、十分な予算が発掘作業以外に振り分けられていないと判断された場合は発掘許可が下りないこと。加えて、発掘完了後5年以内に報告書の刊行が義務づけられていること、である。これらの事実は、現在イスラエル古物局 (Israel Antiquities Authority) が報告書刊行の重要性を認識し、そのための処置を具体的に講じていること、つまりヘルツォグが指摘した現状を改善しようという姿勢を反映したものであると言えよう。

カラゲオルギスによる発掘報告書刊行遅延の余韻とその克服のための対処法

カラゲオルギスもヘルツォグ同様、発掘報告書の多くが出版されない状態を危惧している。彼は「出版するか消え去るか… (It's Publish or Perish...)」という題目つけているが、「Publish or Perish」という言葉は、もともと研究業績を出版しない研究者は学界から消えていくことを表す表現である。彼はこの言葉を、考古学者と発掘報告書との関係に結びつけると同時に、報告されない発掘の情報はやがて消えていく、という事実を警鐘を鳴らしている。

彼はまず、今日の大衆文化において考古学がどれだけ人

気があるかに言及し、同時に考古学という学問の発展と専門の細分化、大学教育における考古学コースの充実などを取り上げる。こうした現状と相まって、多くの文化財団、研究所、あるいは個人が莫大な財政的支援を行って発掘が行われていることをカラゲオルギスは指摘する。そして、費やされた時間、費用、エネルギーに対し、それに見合う程度の知見を考古学者は広げているか、と自問するのである。

カラゲオルギスは過去を振り返り、博士論文執筆中に彼が経験した問題の一つとして、自分の研究で扱いたいと思っていた遺物があっても、発掘した人間がそれについて報告書を書いていないがために、それらに言及することさえできなかつた、という事実を述べている。当時、発掘した人間が出版する権利を有する、という特権に誰も疑いを差し挟むことはなかつたが、自分自身が同様の立場に置かれて若い研究者の現状を眺めるようになると、状況がまったく変わっていないことに気づいた、と彼は嘆く。

またカラゲオルギスは、遺物ばかりではなく、多大な労力を費やして行った発掘の記録すべてが、フィールドノートの中で眠ったままになっていることに言及する。これらの情報は毎年増加していくのに、考古学者たちは、すべての問題が解決した時にじっくりと腰を据えて発掘報告書に取り組もう、と希望し待っているだけだ、と彼は指摘する。しかし実際には、こうした段階に辿りつけることはほとんどない。たとえ考古学者がその一生を費やした発掘であっても、すべての問題が解決された例を知らない、とカラゲオルギスは言う。多くの考古学者は何十年に及ぶ発掘の秘密を携えたまま死ぬのであり、まさに「Publish or Perish」なのである。「あの人は死ぬまでに報告書を公刊しなかつた」、とある考古学者のことを非難することがあるが、概報だけ書いて発掘のペースを落とさない我々も、実のところ同じ過ちを犯し続けている、とカラゲオルギスは言う。

カラゲオルギスは、発掘を、「多くの考古学者にとって抑えの利かない中毒のようなもの」と表現する。「毎年ひと月かふた月現場で過ごせば、カラスライドつきの講演のために十分な材料が手に入るだろう、という期待は打ち勝つことのできない誘惑である」と彼は述べる。それゆえ、予備報告にも、おしまいに必ず「さらなる発掘によってこの問題は解明されるであろう」と付け加えてしまうのが常となっている。カラゲオルギスはこれを「決して終わることがない悪循環」と表現する。「一部の考古学者にとっては、『発掘』という行為自体、とりわけ外国での発掘こそが彼らの社会的地位の一部であり、学問の世界にあって彼らの威信と地位を高めるものなのだ」、と彼は指摘する。自国の遺跡で発掘することができるのに「外国での調査団

を統率する」ことに莫大な金をつぎ込むことにこだわる地中海諸国の考古学者を知っている、とカラゲオルギスは述べ、こういった考古学者が存在する理由として、発掘機会のない考古学者たちはしばしば同僚たちから惨めに思われ、また種々の理由で発掘を中断した人たちは不名誉なことだと感じる、という点を挙げている。

カラゲオルギスは長年キプロスの古物局長を務めていた人物だが、彼自身、「古物局長たちは自分自身で発掘を行うが、行政上の重大な職務のゆえに発掘の成果を公刊することはほとんどできない」と述べる。彼らは退職後に、報告書執筆の義務を果たすことができる、という誤った希望を持って生活しているが、その時が来ると克服不可能な困難に直面する。その時には、手伝ってくれる技術者や助手が周りにいなくなってしまうからである。自分自身が発掘報告書を公刊していないために、他の同僚に発掘報告書を公刊するよう圧力をかけることは道義上できないと感じてしまう、と彼は告白する。

カラゲオルギスが古物局長を務めていた時代に、緊急発掘を含め多くの発掘調査が同時進行していたが、この頃、発掘許可の条件に、発掘が始まってから5年経過した時点で報告書を刊行する、という条項が盛り込まれ、これが守られない場合は発掘許可が取り消されるようになった。この条項が盛り込まれた結果、考古学者たちは各々所属する大学に報告書刊行の便宜を図るよう要求し、これが功を奏したとカラゲオルギスは述懐している。

大型の遺跡の場合、5年間というのは「最終報告」を書きあげるには短すぎるように思えるが、実際に発掘が「終了する」のを待っていたなら、何十年も待たなければならないだろう。さらに忘れてはならないのは、どんなに十分な記録を残していたとしても発掘時の記憶は時と共に「忘れる」ということである、とカラゲオルギスは言う。報告書の中で述べたことは、後から修正ができると考えれば、5年間というのは最終報告書のために適正な時間である。カラゲオルギスは報告書を滞りなく執筆するために、各発掘シーズンの終わりにしっかりとした予備報告を書くことを勧める。

さらにカラゲオルギスは、報告書を刊行しない考古学者が、自分よりも立場が上であったり、政治的影響力が大きい人物であったりした場合、古物局長と雖も許可を抹消することが難しいことを告白した上で、それをあくまで断行するか、もしくは諮問機関を設置し、機関決定として発掘許可を抹消する必要性を説く。また、ユネスコが発掘報告書を刊行しない考古学者たちに「制裁」を加えることも考慮すべきであると述べる。発掘の資金を出資する機関が、報告書刊行を怠る考古学者に対して資金提供を中止することも効果があるだろう。カラゲオルギスは地中海地域、レ

ヴァント、近東における古物局長すべてを集めた会合を組織して、報告書刊行の責務を強調する必要を説く。

以上、ヘルツォグとカラゲオルギスの論稿を紹介した。両者とも発掘報告書刊行の重要性を説く点では一致しているが、細部には違いも見られる。ヘルツォグは予備報告や概報などを出版するよりも完全な報告書に向けて、予算の配分を含む計画的な発掘調査を重視すべきであると述べているのに対し、カラゲオルギスは各発掘シーズン終わりに詳細な予備報告を作成することが最終報告作成の負担軽減につながる、としている。後者は、予備報告さえ出版せずに死んでいった考古学者を多く知っているために、少なくとも何かしらを出版し、情報がすべて失われてしまうのを防ぐべきだ、と考えているようである。また、ヘルツォグが考古学者自身、発掘報告書刊行のために何ができるか、という具体的な助言を中心に展開しているのに対し、カラゲオルギスはより大局的な視点から学界全体としてどのように取り組みができるかについても言及している。

発掘報告書刊行に向けた日本の調査隊の課題

以下、上述の論稿と関連づけつつ、西アジアにおける日本の調査隊が発掘報告書刊行に際して直面する問題について管見を述べたい。まず、ヘルツォグが強調する発掘報告書刊行に向けた発掘計画立案の問題を取り上げたい。西アジアにおける日本の調査隊の発掘資金の大部分は、日本学術振興会の科学研究費であり、そのうち基盤研究海外(A)、(B)による発掘調査が多いと思われる。これらの研究種目の場合、通常3～5年の研究期間が設定される。単一の予算で一遺跡の発掘を行うプロジェクトの場合、ヘルツォグの勧めを適用するならば、発掘の最終年度は報告書刊行に丸々一年費やし、一切の発掘調査を行うべきではないだろう。また、各年度の発掘で出土した資料の分析にも十分な予算や時間を配分できるよう工夫が必要とされる。同一調査団内を構成する異なる分野の研究者による研究成果を、年度末に発表し討議・検討する場を設定し、それを基に発掘調査の予備報告を書くことは、カラゲオルギスが述べるように報告書刊行のためのロードマップとして役立つのではないかと考える。そのためには各研究者が自分の研究を一定の期間内に完了させるよう努力することが求められるからである。

次に実際の出版に関する問題について言及したい。報告書刊行には莫大な資金が必要である。学術振興会には、「研究成果公開促進費」の中に「学術図書」という種目があるが、私見ではこの研究費を最初から当てにして報告書刊行を計画するのは好ましくない。なぜなら採用されない場合、報告書の刊行が遅れるからである。しかし、基盤研究など他の種目の科研費を使って市販を目的とした出版物を作成

することは認められていないため、実際には研究成果公開促進費を取得することが唯一の選択肢である場合も少なくない。ここに日本の調査隊が発掘報告書をなかなか刊行できない要因の一つがあるのではないだろうか。こうした事態を避けるためには、研究成果公開促進費以外にも、所属大学・研究機関や他の財団等の出版助成に応募したり、費用を自前を出さなくても出版を引き受けてくれる出版社を探したりすることが必要であろう。助成を得るためには質の高い内容の報告書でなければならないことは言うまでもないが、たとえ良質な内容でも、発掘の成果が多大な影響を及ぼすと思われぬような報告書の場合は財団等による助成を獲得するのは困難であろう。同時に、市販を目的としない報告書の作成や、インターネット上で閲覧できるように無償の報告書の刊行なども考慮に入れるべき時に来ているのかもしれない。

カラゲオルギスはユネスコなどの国際機関が発掘報告書未刊行という危機的状況に対処するために、報告書を刊行しない考古学者に「制裁」を与えるということができないか、と述べている。日本でも報告書刊行を進めるためにはある種の「制裁」が必要かもしれない。学会が行う「制裁」とは主として名誉の問題であり、罰金などが科されるものではない。例えば、学会からの退会を求めるといった類の決定である。もし日本の複数の考古学会が共に提携し、正当な理由もなく長期間発掘報告書を刊行しない発掘調査隊の責任者をそれぞれの学会から締め出すような決定をするならば、これは発掘書刊行に向けての大きな起爆剤となりえるのではないだろうか。無論、こうした政策を学会が取るとは容易ではないだろう。カラゲオルギスが鋭く指摘するように、時として学会の重鎮がその責務を果たしていないこともあり、その場合、こういった政策を取ることは自分で自分の首を絞めることになるからである。さらに、申請と許可、という取り決めが交わされる発掘調査隊の責任者と現地の古物局の間では「制裁」が有効であっても、調査隊の責任者は日本の所属学会に対しては、何ら取り決めを交わすことなく発掘に従事しているのだから、学会からの「制裁」は「お門違い」となりかねない。いずれにせよ、日本の考古学界全体としてこの報告書刊行の問題を取り上げ、その解決に向けて積極的な議論が交わされることを期待する。

西アジア考古学会としても、この問題を取り上げ論じていく必要があるだろう。また学会はこの問題に関して具体的な援助を学会員に与えることができるかもしれない。実現性を度外視して例を出せば、様々な団体から援助を仰いで、会員の調査隊による発掘報告書刊行を学会としてバックアップできるような体制の整備が挙げられる。質のよい報

告書が連続して刊行されることが期待できれば、学会として特定の出版社とタイアップすることも可能かもしれない。こうしたバックアップを提供した上で、それでも一定期間報告書を刊行しない調査隊の責任者に「制裁」を課す、という方が現実的だろう。

本稿では詳しく取り上げていないが、複数遺跡を発掘する領域的な考古学プロジェクトや、当該国からの緊急発掘の依頼など、発掘報告書刊行につきまとう問題は他にも多々あるだろう。また、西アジア考古学会が学会として取り組むことのできる点もあるだろう。今後、西アジア考古学に携わるすべての研究者の間で発掘報告書刊行の重要性を考慮する機会が増え、さらに活発な議論が展開されることを願っている。

註

- 1) 1シーズンについて1報告書を刊行するという考え方は実際に発掘調査を進めていく上で現実的なものではない場合が多いが、これも大まかな傾向を掴む上で有効な方法とヘルツォグはみなしているようである。
- 2) イスラエルの発掘調査においては、遺物の復元、実測、撮影はそれぞれ考古学研究所の専門家が行うことが普通であり、彼らに調査団が依頼して作業が行われる。また、遺構の実測も専門家に依頼する。これらの専門家はそれぞれ「修復屋」、「実測屋」、「写真家」と呼ばれ、「考古学者」とは区別される。後者はこうして分析可能となったデータを研究材料にする人間である。
- 3) ヘルツォグは「最終報告書 (final report)」ではなく「完全な報告書 (full report)」という呼称を採用することを唱えている。報告書は、発掘の結果生じた論点を論じるための基礎データを提供することを目的とするからである。そのためには、発掘者が持っている遺構・遺物に関する情報を、できうる限り公表することが必要である。無論、報告書自体は研究の最終段階であり、研究上の仮説や研究方法などがそこに表れる。仮説や方法などは発掘を続けていくにしたがって変化していくのが当然であるから、報告書の内容や構成も常に変化していく。それぞれの調査団の目的や研究方法も異なるので、報告書の内容もまた異なったものになるのが普通であろう。完全な報告書とは発掘の概報や予備報告 (preliminary report)、また発掘の概要を要約した本や一般向けのパンフレット状のものなどとはまったく異なっていることが強調されている。その理由は、後者にはすべての必要な情報が公開されていないからである。

参考文献

- Herzog, Z. 1996 The Publication of Archaeological Excavation. *Eretz-Israel: Archaeological, Historical and Geographical Studies* 25: 158-165. (原文ヘブライ語)
- Karageorghis, V. 1996 It's Publish or Perish... *Eretz-Israel: Archaeological, Historical and Geographical Studies* 25: 28-30.

長谷川 修一

立教大学文学部

Shuichi HASEGAWA

Rikkyo University, College of Arts